

Views from Orienteering

村越 真

劇団四季のビジネスモデル

6月12日、附属静岡小学校では6年生が劇団四季の観劇に出かけた。会場である文化会館に着くと、10校ほどの静岡市内の小学校が来ていた。新学期が始まって約2ヶ月、疲労もかなり蓄積していたので、絶対観劇中に寝ると思っていた。いや、むしろ割り切って昼寝の時間にしてしまおうとさえ思っていたが、子どもをおもしろがらせる今風の工夫が随所にあって、飽きなかった。内容は、桃太郎の弟が、鬼退治に出かけるが、サル・キジ・イヌはいい加減な奴らで、おじいさんおばあさんも金の亡者。一方、鬼たちの部落は、桃太郎の「武力侵攻」で疲弊しつくしていた。その惨状を見ているうちに、鬼たちと仲良くなってしまおうという一種道徳的なストーリーだ。

子どものチケット代は集金した学年費から出るのだろう。教員の分は無料招待なのだろうか。気になって聞いてみると、教員・児童とも「ご招待」だと言う。劇団四季だって企業である。収入はどうなっているのだろうか？改めてプログラム冊子を見ると、多くの企業名が協賛として名を連ねている。なるほど、本当にご招待してくれたのはそれらの企業という訳ね。劇団四季は、子どものためになる演劇を学校に提供する。そして、それに対して協賛金を出してくれる企業を募る。その協賛金は、結局は劇団四季を企業的に成り立たせるといふビジネスモデルなのだろう。

「これだ！」この半年、ロゲイニングを学校に提供する方法について考えていたが、組織的に提供するためにはプロフェッショナルなスタッフが必要だ。学校にはお金がないことが一番のネックだった。このビジネスモデルなら、その両方の問題点をクリアすることができるのだ。

静岡では東海地震の30年確率が80%を越え、いつきてもおかしくない状況だ。津波浸水域はもちろん、それ以外の場所でも、子どもたちが地図を使って自分たちの学区の様子を知り、その中を自分の脚で動き回る活動は、必ずや地震時の被害減少に役立つだろう。ロゲイニングはこうした主題にもうってつけだ。企業もこのような社会的意義に対しては資金を提供しやすい。震災以来、地理教育への関心は再び高まっているという。今なら、宝探しにもならないだろう。自らの脚で、正確な地図表現で目的地を目指すことが肝心だからだ。時間的制約というロゲイニングの特徴も、防災との相性がよいだろう。「防災ロゲイニング」は、すでに静岡高校の美澤綾子先生が、勤務校でも実施し、好評だったそうだ。(静岡新聞で記事になっている。
<http://www.at-s.com/news/detail/474565734.html>)

学校の自然体験と地図

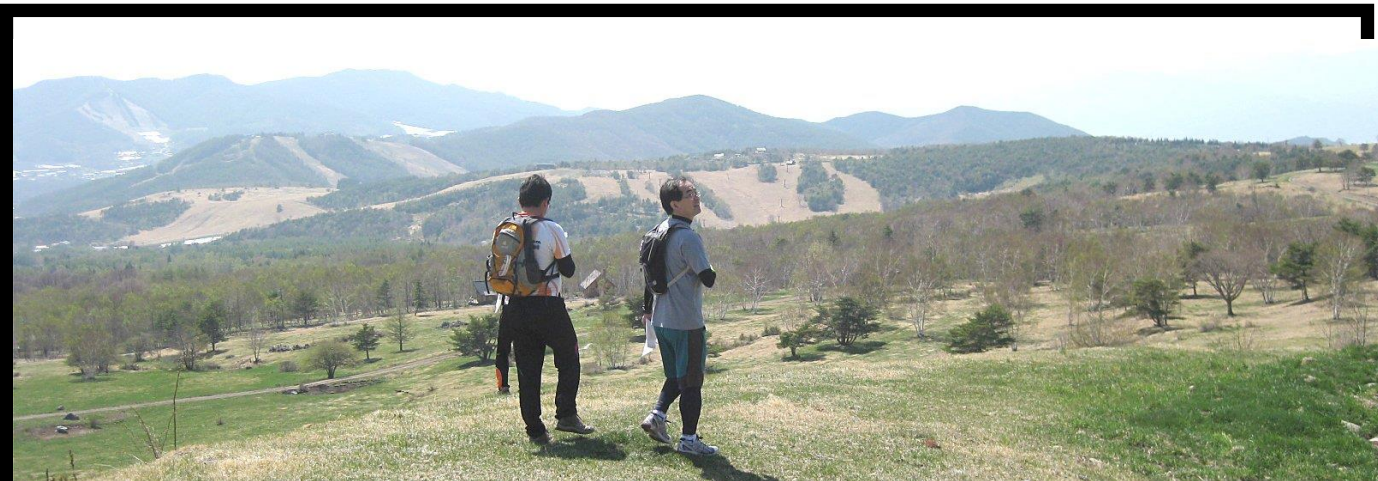
初夏になると、小学校の自然体験活動が行われる。多くは小学校5年生での実施だが、私が勤務する附属静岡小学

校は4-6年の縦割りで、参加総数も300名を超える大行事だ。活動内容そのものは、テント泊で、飯ごう炊飯をして、ウォークラリーやハイキングをするという一般的なものだが、テントは自分たちで張らなければならないし、食事もほぼ全て自炊する。最近の小学校のキャンプとしては、かなりレベルの高い活動だろう。

そのため、この行事に向けて、木曜日の午後約10回を使った事前学習が行われる。それらも上級生が中心になって自主的に行われる。OBからも、是非継続してほしい思い出に残る行事だという評価を受けている。

このキャンプの教員内での最初の説明会の時、ハイキングの地図が配られた。ルートとそこから分岐する道が線で描かれたイラストマップ以下の地図だ。子どもたちにナビゲーションで地図を読ませるのはかなりの準備と覚悟が必要だから、子どもがこの地図でハイキングをするのは、まあ目をつぶろう。だが、まさか教員はこれではないだろう。そう思ってとりあえずは静観した。そして、キャンプを1月後に控えた第二回の説明会では、キャンプ日程の詳細な説明が行われたにもかかわらず、出てきたのは同じ地図。「教員はこの地図じゃないですよね？」と聞いたら、これを使うという。これには驚いた。

かつては小学校の地図帳にも地形図が紹介されていたし、今でも等高線は地図帳の最初のページで紹介されてい



イベントPR: 第40回全日本オリエンテーリング大会
2014年4月27日 長野県上田市菅平高原

る。地図についての学習も4年生で行う。だが、それを野外活動の中で活用しようという発想は、小学校教員にはほとんどないようだ。ナビゲーションには無理でも、距離を測ったり、はっきりしたランドマークを把握することは、小学校高学年なら難しくないだろう。地形図の記号や等高線から、コースの状態を読み取りリスクを考えたこともできる（これは別の学校で実施し、小学校5年生ならできることが確かめられている）。学習内容を日常生活に結びつける絶好の機会なのに……。来年に向けての大きな課題となった。同時に、正確な地図がないと安心できないというオリエンティア気質は、一般社会の中ではかなり特殊な部類に属することを思い知らされた。

『登山者の啓発』というけれど、学校教育がこんな状態なんです。これじゃあ、自分で地図を読んでリスクに備える登山者が育ちませんよね」と日本山岳協会の遭難対策委員会講演で指摘したら、遭難対策委員のMLの間で議論が白熱したという。山岳遭難は漸増傾向が続き、富士山世界遺産の影響などもあり、軽微な遭難が増えている。富士山ではこの夏、昨年の2.5倍の遭難数があったという。

遭難減少はアウトドア界においても重要な活動だが、そのヒントは案外身近なところにあるのだと思う。

JOC 加盟

6月末に行われた日本オリンピック委員会（JOC）の評議会で、日本オリエンテーリング協会は承認団体として認定された。日本体育協会がスポーツ全般を統括するのに対して、JOCは言わずと知れた競技スポーツの統括団体であ

る。正加盟の多くのスポーツ団体は五輪種目で、それ以外のスポーツ連盟が準加盟としてその一員となっている。今回 JOC が認定されたのは「承認団体」というその下のカテゴリーで、今回からできたものだ。オリンピックムーブメントの広がりに合わせて、積極的に五輪やマルチスポーツゲーム種目でないスポーツ種目の団体に門戸を広げる意味で、作られたと考えてよい。この経緯や直接的な意義は別記事に詳しいので、JOC に加盟することの間接的な意義について考えてみたい。

第一に JOC に加盟することは、オリンピックムーブメントに賛同し、それに寄与することを表明したことを意味する。五輪はいい面ばかりではない。今更アマチュアリズムを持ち出すこともないが、肥大化した運営やそれによる開催国への負荷、種目採用が現実的にスポーツの死命を制するほどの力を持つてしまったことは、レスリング協会の動きを見ても分かる。

何より IOC やその委員たちは、そのことに無自覚なように思える。東京五輪は招致に成功したが、それを伝える特番の多くでは、都市基盤がどうの、経済効果がどうかという話ばかりだ。震災復興を掲げてはいるが、その多くは皮相的でスポーツの本質に迫るものではない。五輪運動に賛同するとは、こうした問題点から目を背けるのではなく、五輪の理念から現状に対して建設的な批判を行うことをも意味する。

アマチュアリズムが揺らぎ始めたころだが、「オリエンテーリングこそ五輪の理念を体現したスポーツ」といった内容が五輪と IOC についての本に書かれていたこともある。JOC へ加盟し、五輪に間接的ながらも関わることを、

自分たちのスポーツの特長を再認識する契機としたい。

第二に、五輪運動に賛同するということは「より高く、より速く、より強く」という競技スポーツとしては当たり前のテーゼに賛同することでもある。オリエンテーリングは競技スポーツだと、密やかに語られる。競技スポーツは自分のパフォーマンスを少しでも高める努力を要求する。もちろん、エリート選手を除けば、自分のパフォーマンスを高めるために全てを犠牲にすることはできない。しかし、オリエンテーリングで E や A クラスに出る人のいったいどのくらいの割合の人が、可能な限りのパフォーマンス向上の努力や工夫をしているだろうか。競技スポーツへの否定は、僕らの心の中にこそあって、それは JOLC 時代の負の遺産なのかもしれない。歴史的な経緯も踏まえた、スポーツの再定義が必要だ。

JOC への加盟、ひいては五輪運動への参加は、こうした自己への省察を突きつけてくれる。

(村越 真)

